

吉野町

～豊かな地域資源を活かし、持続可能なまちづくりを展開～

奈良県中央部に位置する吉野町は、吉野山の桜で全国的に有名なまちです。吉野材の集積地として発展し全国に銘木・吉野材を供給していましたが、木材関連産業の衰退や人口減少・少子高齢化など、現在の地域経済を取り巻く環境は厳しさを増しています。2021年4月からスタートした総合計画では、「ひと」が主役となったまちづくり施策を軸に、これらの課題解決に取り組んでいます。

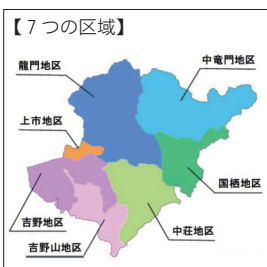
I 概要

1. 地理と歴史

吉野町は県中央部に位置する人口7,399人（県内39市町村中24位）、世帯数2,946世帯（同23位）、面積96km²（同12位）の町である（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2015年））。

「吉野」の名称は、古事記、日本書紀、万葉集に記述があり、また吉野山は源義経、後醍醐天皇が登場する物語の舞台として知られている。中心部の集落や工場は、戦後、林業や木材関連産業の従事者が吉野川の上流地域などから移住して形成されたもので、1956年に旧吉野町、上市町、中荘村、中龍門村、^{くま}龍門村が合併して現在の吉野町となった。この旧6町村と吉野山の7つの地区は現在も生活上のつながりが深く、同町がまちづくりを進める上で、基本的な生活区域と位置付けられている。

吉野町の位置図



町の中央部を東から西に吉野川が流れ、町域の一部は吉野熊野国立公園、吉野川・津風呂県立自然公園に指定されるなど、豊かな自然に囲まれて

いる。

公共交通は近鉄吉野線の大和上市駅、吉野神宮駅、吉野駅の3駅があるほか、コミュニティバスが町内を運行している。道路ネットワークは国道169号線と370号線が、主要幹線道路として隣接する桜井市、宇陀市、大淀町、川上村方面につながっている。奈良市内、大阪市内へは鉄道、車ともに90分程度で到着でき、桜や川遊びを目当てに京阪神方面から訪れる人も多い。

2. 産業構造

従業地による就業者人口（15歳以上）の産業別割合を見ると、第1次産業が5.8%、第2次産業が29.9%、第3次産業が64.3%と、奈良県全体（順に3.4%、22.2%、74.4%）と比べて第1次産業、第2次産業のウエイトが高い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015年））。

民営事業所数は715か所（県内18位）で従業者数は3,322人（同22位）。製造業においては木材・木製品製造業が事業所数、従業員数ともに5割超を占めている（総務省・経済産業省「経済センサス活動調査」（2016年））。

3. 人口構造

年齢階級別人口移動を見ると、男女ともに20歳代前半の転出超過が大きい。進学・就職を機に他都道府県や県内他市町村に転出する人が多くなっている（総務省「国勢調査 移動人口の男女・年齢等集計」（2015年））。

II 町の活性化に向けた様々な取り組み

2020年2月に第6代吉野町長に就任した中井章太町長は吉野林業の山守の家系に生まれ、町議会議員を3期務めた。就任直後からコロナ禍に伴う事業所・住民支援に奔走する一方、持続可能な地域社会を実現するための取り組みを進めてきた。

2021年度からスタートした「第5次吉野町総合計画（計画期間：2021年度～2030年度）」では、吉野町の最高規範である「吉野町まちづくり基本条例（2015年4月施行）」の基本理念と基本原則を踏まえた上で、新たな視点と発想でのまちづくりを進めていく。

1. 新総合計画の概要

新しい総合計画のテーマは、『「ひと」がつながり「ひと」が輝き「ひと」が潤う 感動生まれる 吉野町』で、町内の中学生をはじめ幅広い町民の意見をもとに定めた「まちの将来像」である。このテーマにはまちづくりの主役は「ひと」とあるとの強い想いがこもっており、同町に関わるあらゆる人がまちの明るい未来を実感し、「ワクワクドキドキ」できるようなまちづくりを目指していく。

2. 地方創生への取り組み

同町では、主要産業である木材関連産業の需要低迷等による町内の雇用環境の悪化で、1980年代後半から町外への転出による人口の社会減が顕著となった。また町内の経済環境の厳しさから合計特殊出生率が低水準で推移したほか、若い世代

が進学・就職等を機に流出したことが人口の自然減を誘発し、都市部よりかなり早く人口減少社会に突入した。また人口減少とともに世帯数も減少に転じ、空き家が増加している。

そのような中、同町では2021年度からスタートした「第2期吉野町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を総合計画の重点プロジェクトと位置付け、人口減少という最大の社会課題に向き合っていく。

豊かな自然に囲まれ全国的な知名度もある同町にとって、コロナ禍でのワーケーションや二拠点居住は、移住・定住促進や関係人口創出の可能性を広げるものと考えられる。

同町ならではのユニークな取り組みもある。関係人口創出事業「TENJIKU」では、ゲストハウス・移住体験スペース「三奇楼」などで旅人が地域に滞在しながら地域の仕事、お手伝い、地域交流体験を行う新たな旅のスタイルを提供している。また「吉野杉の家」は、宿泊者や見学者に吉野材の魅力を感じてもらおうとともに、地域コミュニティ（吉野の人たち）がホストとなり、地域と交流するためのスペースとして活用されている。



「三奇楼」でのテレワーク

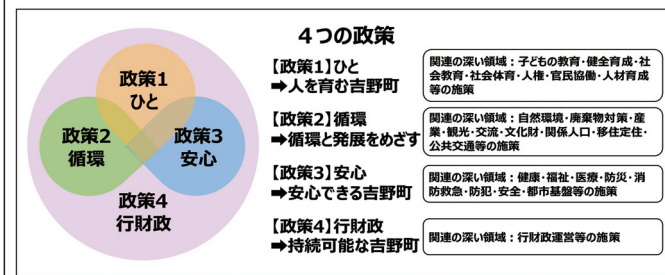


吉野杉の家

●第5次 吉野町総合計画

基本理念・基本原則 吉野町まちづくり基本条例

まちの将来像
「ひと」がつながり「ひと」が輝き「ひと」が潤う 感動生まれる 吉野町



第2期吉野町まち・ひと・しごと創生総合戦略（総合計画の重点プロジェクト）

【基本目標Ⅰ】多様な連携や民間活力の活用により、地域経済を活性化し、安定した雇用を創出する

基本方針①	地域産業の担い手確保と地域人材の養成
基本方針②	基幹産業の強化による地域経済の活性化
基本方針③	地域資源の発掘・研ぎによる地域経済の活性化
基本方針④	地域産業に関連する起業・創業支援による地域経済の発展
基本方針⑤	企業ニーズに対応した環境・制度の整備や企業等との連携の促進

【基本目標Ⅱ】地域のなかで安心して暮らしていることができるまちづくり

基本方針①	みんなで支え合い・安心して暮らせる地域社会の形成
基本方針②	いきいきと暮らすことのできる健康長寿社会の形成
基本方針③	地域における女性の活躍推進
基本方針④	郷土愛・愛着心の醸成

【基本目標Ⅲ】結婚・出産・子育ての希望をかなえる

基本方針①	安心して子育てできる環境整備
基本方針②	結婚・出産・子育て支援の充実
基本方針③	子育てと仕事の両立支援

【基本目標Ⅳ】新しいひとの流れをつくり、ひとが集う、魅力的な地域をつくる

基本方針①	定住・移住の促進
基本方針②	若い世代の転出の抑制・防止
基本方針③	関係人口の拡大

3. 木材関連産業の現状と活性化への取組み

○吉野林業・木材関連産業の歴史

吉野地域は日本最古の人工造林で500年の歴史を誇る。「密植、多間伐、長伐期」という独自の技術で大切に育てられ、年輪幅が狭く均一で節のない最高の良質材として大阪城・伏見城の築城にも使われた。江戸時代には醬油樽、味噌樽など樽の用材として重宝され、昭和期には美しい木目で和室空間に合う吉野材ブランドとして全国に出荷されるようになった。山林資源は独特な山守制度により維持・管理され、何世代にもわたって現在まで継承されてきた。

○基幹産業としての木材関連産業

同町は伐採された原木が吉野川を經由して集積する市場として発達し、吉野材を高級建築材に加工する製材業、その端材を利用する製箸業などの木材関連産業が同町の基幹産業である。

しかしながら、安価な外材との競合、生活スタイルの変化による和室の減少など、木材関連産業を取り巻く環境は厳しく、事業所数も年々減少、人口流出の大きな要因となっている。

○産業ツーリズム

町制60周年の2016年には、吉野林業の歴史や木の文化を次世代へ引き継いでいきたいとの想いを込め『「木のまち吉野」未来宣言』を行い、地域が一丸となって木材関連産業の振興に取り組んできた。

その一環として、同町では貯木場や製材所を実際に訪れ魅力を体感してもらう「産業ツーリズム」を推進、コロナ前までは宿泊・見学・視察者は増加傾向であった。これまで消費者にはなかなかイメージできなかった現場に関する情報を発信するとともに、建築材以外の多様な用途についても紹介する機会となることから、新たな需要発掘につながる取組みと期待される。

○奈良県フォレスターアカデミーが開校

2021年4月、奈良県立吉野高校（2023年閉校）の空きスペースに奈良県フォレスターアカデミー

が開校した。スイスの森林環境管理を参考に、専門的な知識を基に地域の特性に応じた森林環境管理を実践することができる技術を備えた人材を養成していく。

同校の学生は在学中吉野地域で過ごすこととなるが、その間に様々な交流を通じて地域を理解してもらい、将来的には他地域との懸け橋となってくれることを期待している。

○コロナ禍における新たな動き

足もとでは輸入木材の高騰「ウッドショック」が住宅業界を襲い、国産材に注目が集まっている。もっとも林業従事者の減少やサプライチェーンの問題もあり、国産材へのシフトが進む状況にはなっていない。しかしながら、これからの林業・木材関連産業のあり方に一石を投じたのではないだろうか。

ウィズコロナ、アフターコロナにおいてはWEBや動画を活用した情報発信、木工製品や需要が拡大するDIY材料の通信販売など、新たな領域への挑戦が必要となる。これらの動きに的確に対応することで、吉野材活用の振興策を新たな視点から検討していく。

○SDGs（持続可能な開発目標）の視点から

吉野の割り箸は、酒樽の材料の端材が捨てられるのを惜しんで考案されたもので、現在も建築材の端材を利用して一本一本丁寧に加工して作られている。一部では森林破壊につながるなどの誤解があるが、地域資源の有効活用、森林循環の促進につながる取組みで、現在注目を集めるSDGsの考え方にも合致している。製箸業は持続可能な地域社会を形成していく上で不可欠な産業で、同町ではその伝統・文化を次世代に継承していくためにも産業振興に取り組んでいく。



貯木場



吉野杉・桧箸

4. 観光振興への取組み

○吉野観光の現状と課題

吉野は古くから山岳信仰の聖地で、観光・行楽の目的地となっており、現在も観桜期には桜を目当てに全国各地から観光客が訪れている。吉野の桜はもともと花見が目的ではなく、蔵王権現や役行者に対する信仰の証として信者たちの献木として植え続けられたものである。2004年には吉野山一帯が世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録され、インバウンドからの認知度も高まった。

一方で、同町は観光地として「観桜期集中型」「情報発信力の弱さ」「町内2次交通の弱さ」といった課題がある。これらの課題解決とともに、観光の持つ力を地方創生に活かすための方策を具体化することを目標に2018年「吉野町観光振興計画」を策定した。

○ウィズコロナ、アフターコロナの観光戦略

コロナ禍を受けた観光戦略の抜本的な見直しとともに、観桜期集中型から通年型観光地への転換は同町にとって普遍的な目標である。そのためには、世界遺産のある吉野山を軸に、吉野離宮の跡と推定される宮滝遺跡など周辺エリアを連携させ、歴史や自然、地場産業の体験等を活かした観光地づくりとともに、県内市町村と連携したマイクロツーリズムの推進等、新しい価値観・新たな循環を創出することで、滞在型観光の仕組みを構築していく必要がある。2020年9月には同町の中井町長と奈良市、田原本町、明日香村の各首長との対談の中で観光振興に関して4市町村が広域連携することとなった。各地域の魅力ある地域資源を活かし、滞在型観光を推進していく。



宮滝の集落

吉野山は観光名所が分散しており、移動手段の確保が長年の課題となっていることから、新たな観光モビリティの導入が検討されている。今後、地域住民の協力を仰ぎながら、電動車の走行実験など導入に向けた新たな取組みが検討されている。

○ワールドマスターズゲームズ 2021 関西

世界最大級の生涯スポーツの国際総合競技大会で、コロナ禍で延期され2022年5月に開催予定となっている。同町ではカヌースプリントが津風呂湖競技場で開催される。同町ではこれを契機に津風呂湖の周辺整備を進め、カヌーを切り口に滞在型観光を推進、マイクロツーリズムやワーケーションの需要を取り込んでいく。



吉野山の桜



津風呂湖カヌー競技場

5. 明るく希望に満ちあふれた未来を目指して

地域内交通は、高齢者の通院や買い物などに不可欠で、現在コミュニティバスが運行されているが、定時定路線型の運行で利便性や効率性が課題となっている。2021年7月、新たな交通システム導入に向け、デマンドバスの実証試験運行を開始した。5台の小型バスが利用者の希望日時に応じた運行を行うサービスで、地域内交通のあり方を検討する上での参考としていく。

2022年には現在の吉野中学校の敷地に小中一貫教育校が開校する。廃校となる小学校の跡地を地域の賑わいの拠点として活用できれば、地域内交通の維持にも寄与するものと思われる。

同町では今後、中井町長のリーダーシップのもと、アフターコロナを見据えた新たなまちづくりや観光施策が展開されていくこととなる。中井町長は、吉野町の持続的な発展につなげていくことを常に意識し諸施策に取り組む。そのためには官民連携が重要で、官は民の活力創造をサポートし、地域経済の好循環を生み出すようなインフラ整備を行っていくというスタンスだ。

人口減少・少子高齢化といった社会課題に正面から向き合いつつ、全国的に知られる「吉野」の名をさらに価値あるものに高めていく同町の取組みに注目したい。（秋山利隆、丸尾尚史）